

世界遺産としてのル・コルビュジエの建築作品群

東京理科大学 理工学部 建築学科
教授 山名 善之

1.はじめに

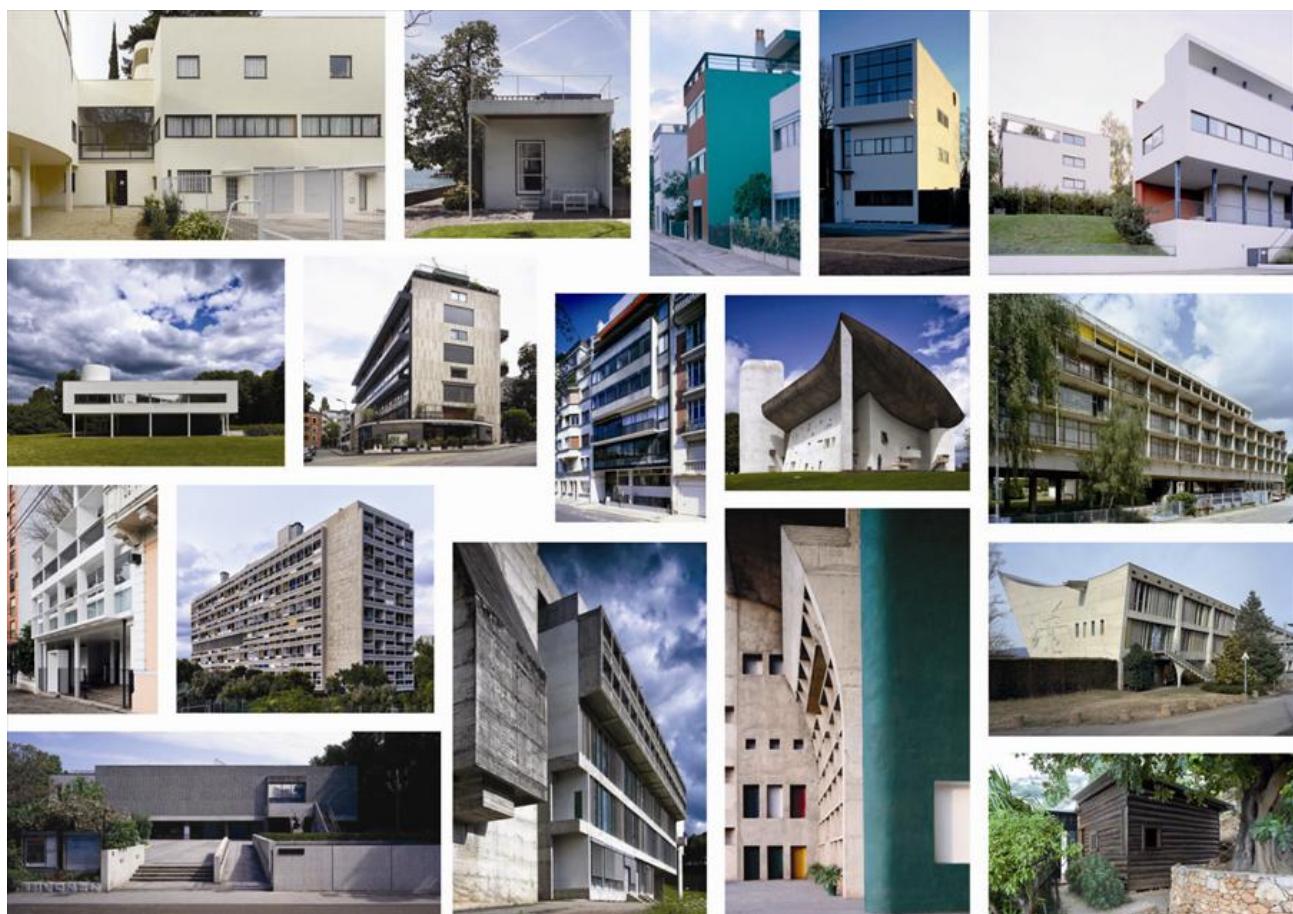
国立西洋美術館を含む世界遺産『ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—』が、2016年7月17日にユネスコ第40回世界遺産委員会において世界遺産に登録された。これは、20世紀を代表する建築家といわれるル・コルビュジエによる17の建築作品を文化財として有する7か国が共同推薦したものである（表-1、写真-1）。筆者は世界遺産推薦書類の国際起草委員会のひとりとして、15年ほど推薦書類策定を学術的にサポートしてきたが、その経験から得た知見に基づいて今回の世界遺産登録の意義についてこの場を借りて報告させていただく。

モダン・ムーブメント（近代建築運動）による建築は20世紀における建築の主要な潮流である。それは19世紀以前の様式建築を批判し、市民革命と産業革命以降の社会の現実に対応する建築をめざすものであった。

表-1 世界遺産『ル・コルビュジエの建築作品』

国名	資産の名称	設計決定年
フランス(10)	ラ・ロッシュ＝ジャンヌ邸	1923
	ペサックの集合住宅	1924
	サヴォア邸と庭師小屋	1928
	ナンジェセール・エ・コリ通りのアパート	1931
	マルセイユのユニテ・ダビタシオン	1945
	サン・ディエの工場	1946
	ロンシャンの礼拝堂	1950
	カップ・マルタンの小屋	1951
	ラ・トゥーレットの修道院	1953
	フィルミニの文化と青少年の家	1953-1965
スイス(2)	レマン湖畔の小さな家	1923
	イムーブル・クラルテ	1930
ドイツ(1)	ヴァイセンホフ・ジードルングの住宅	1927
ベルギー(1)	ギエット邸	1926
アルゼンチン(1)	クルチエット邸	1949
インド(1)	チャンディガールのキャピトル・コンプレックス	1952
日本(1)	国立西洋美術館	1955※

※設計契約時期と設計図面の日付のうち最も古いものを考慮して1955年を採用。



写真提供：Fondation Le Corbusier

写真-1 世界遺産『ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—』
7か国に現存する17資産

地球規模で進行した大衆市民社会の成立、産業構造の変化、メガロポリスの誕生へと至る都市化といった近代における様々な課題に対して、「新しい建築」はモダン・ムーブメントの流れをおこしながら、国際的拡張をつくりだしていったのである。建築におけるモダン・ムーブメントのなかで主要な役割を果たしたひとりがパリを中心に活躍したスイス生まれの建築家ル・コルビュジエである。

国立西洋美術館を含む世界遺産『ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—』は、そのような《彼》の総合的な人間性を反映した文化を表象する17の建築作品によるシリアル・ノミネーションである。フランスにある《彼》の国際的名声を確実にした「サヴォワ邸」や、団地住居棟のプロトタイプ「マルセイユのユニテ・ダビタシオン」は世界中に影響を与えた。また、「ロンシャンの礼拝堂」の優美な空間造形は時間を超えて多くの人々に感動を与え続けている。

これらは文化遺産としての世界的評価も高く、単体の文化財として世界遺産に登録されることも考えられた。しかし、今回の世界遺産登録は今までの単体の文化財による登録とは全く違った意味を持っている。世界遺産に登録された国境を越え7か国そして三大陸に拡がる17作品は、単体としてではなく、むしろ、総体として傑出した普遍的価値を持つというところに、この世界遺産の意義があるのである。ある特定の地域に根差す文化だけではなく、20世紀を通して地球上に拡がった共有できる文化圏の世界遺産登録というところが今回のシリアル・ノミネーションの意味するところなのである。

この世界遺産登録の重要な点は、副題であるル・コルビュジエ建築作品の『近代建築運動への顕著な貢献』にある。20世紀は、モダン・ムーブメントによってそれまで国や地域において固有であった建築の作法や技術が国境を越えてグローバルに地球上に同時存在することを助長した時代であった。そして「近代」という社会における共同体のための建築・都市のあり方が美学的共感と共に国際的拡張をみせた時代でもあった。モダン・ムーブメントの背景にあったのは、産業革命以来の工業化社会である。産業革命による機械化が成熟し、自動車などの大量生産の時代まで、つまり第一次世界大戦終結（1918年）前後からの半世紀続いた社会をうつしだした建築を、ル・コルビュジエは考案し創り出していく。これらの都市とそこに住まう人々、その時代の共同体のあり方を、文化財となったル・コルビュジエの建築作品群を通してみることができるのである。

ル・コルビュジエは、図-1のようにあらゆる大陸にプロジェクトを持ち、多くの建築作品、都市計画を実現した。このなかで現存する建築作品は68資産（図-2）であるが、世界遺産「ル・コルビュジエの建築作品」に登録されたのは、その保存状態の良さ、国レベルでの文化財保護、インテグリティとオーセンティシティ、OUV（顕著な普遍的価値）といった観点から17資産へと絞り込んでいった。

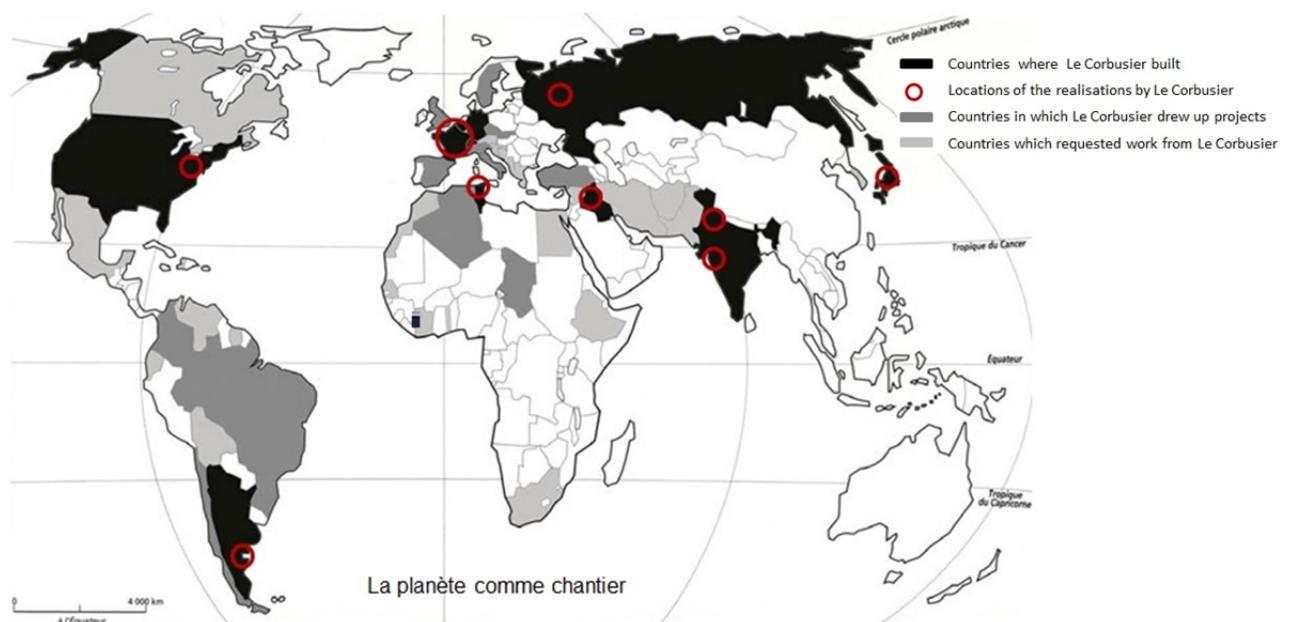


図-1 地球上に拡がるル・コルビュジエのプロジェクト

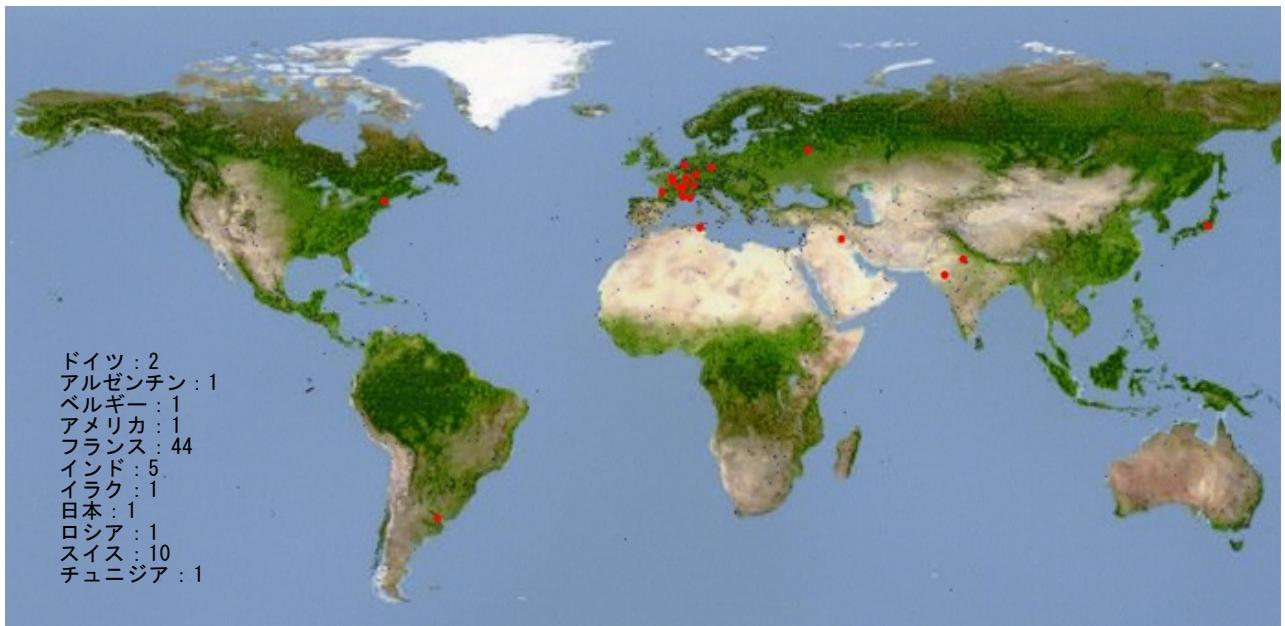


図-2 ル・コルビュジエの現存する建築作品

また、この地球上に拡がるル・コルビュジエ作品の状況は、勿論、時代背景と共にル・コルビュジエが描き上げていった国境を越え拡がり得る建築や、都市に対する理論によるところが大きく、それが多くの出版物によって彼の考えが広められていったことを無視することはできない。

また、ル・コルビュジエらが結成した近代建築国際会議（CIAM : Congrès International d'Architecture Moderne）を通して、近代の建築や都市のあり方が議論された。それだけでなく1920年代の中葉から多くの若手建築家が彼のアトリエをめざし世界中から集まり、彼の理論を、建築作品、都市計画の設計という実践を通して修得し、また彼らが祖国に帰り近代建築運動を拡げていったことも注目すべき点である。日本においても1920年代末の前川國男のアトリエ入所に始まり、坂倉準三、吉阪隆正など多くの若手建築家が彼の下で研鑽を積み、帰国後、ル・コルビュジエの理論、近代建築運動を日本で実作をつくりだすことを通じて広げていったことも、近代建築運動の拡がりをつくりだし得るメカニズムと言えるであろう。

この地球上に拡がった近代建築運動の文化的な様相を、今回登録された17資産総体として示し得るというのが登録へのOUVの根幹である。つまり、単体ではなく国境を越えた国際的なシリアルでの登録の意義がそこにあるのである。

OUV（顕著な普遍的価値）

世界遺産に登録されるためには、顕著な普遍的価値（OUV : Outstanding Universal Value）を有していることが求められる。それは世界遺産の作業指針に示される10項目からなる世界遺産登録基準のいずれか1つ以上を満たすことが登録の条件であるが、今回はその内、以下の3項目が登録基準として採用された。

- (i) 人類の創造的才能を表現する傑作。
- (ii) ある期間を通じてまたはある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。
- (vi) 顕著で普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰または芸術的、文学的作品と直接にまたは明白に関連するもの。

下記が世界遺産委員会で審議決定された登録基準に基づいて記述された顕著な普遍的価値（OUV）の内容である。

登録基準(i)

ル・コルビュジエの建築作品は、人類の創造的才能を現す傑作であり、建築及び社会における20世紀の根源的な諸課題に対して顕著な回答を与えるものである。

ル・コルビュジエの建築作品は、近代建築運動の誕生と発展に関して、全世界規模で半世紀にわたって起こった、前例のない人類の価値の交流を示している。ル・コルビュジエの建築作品は、他に例を見ない先駆的なやり方で、過去と決別した新しい建築的言語を開発してみせることによって、建築に革命を引き起した。

登録基準(ii)

ル・コルビュジエの建築作品は、ピュリズム、ブルータリズム、彫刻的建築という近代建築の3つの大きな潮流の誕生の印である。ル・コルビュジエの建築作品が4大陸で与えた地球規模の影響は、建築史上新しい現象であり、前例のない影響を示すものである。

ル・コルビュジエの建築作品は、その理論と作品において20世紀における顕著な普遍的意義をもつ近代建築運動の思想と、直接的かつ物質的に関連している。一連の資産は、建築、絵画そして彫刻が統合した「エスプリ・ヌーヴォー」を表している。ル・コルビュジエの建築作品は、1928年以降CIAM（近代建築国際会議）により強力に広められた、ル・コルビュジエの思想を具現化している。

登録基準(vi)

ル・コルビュジエの建築作品は、新しい建築言語の発明、建築技術の近代化、近代人の社会的・人間的ニーズへの対応のために、近代建築運動が20世紀の主要課題に対応しようとした解決策の顕著な現れである。20世紀の主要課題に対するル・コルビュジエの建築作品の貢献は、単に、ある時点での模範的な偉業にとどまらず、半世紀を通じて全世界に着実に広められていった建築及び文字による提案の顕著な総体である。

2. 国立西洋美術館

1920年頃、川崎造船所社長の松方幸次郎はヨーロッパで絵画などの美術作品を収集したが、第二次世界大戦後、フランスで収集した数多くの美術品「松方コレクション」は、敵国財産としてフランス政府の管理下に置かれることになった。戦後の1953年、日仏文化協定に基づき「松方コレクション」は日本へ寄贈返還されることが決まり、返還条件として、フランス美術を展覧するための新美術館の設置をフランス政府は要望した。この条件を満たすために国立西洋美術館（写真-2）が建設された。



写真提供：Fondation Le Corbusier

写真-2 国立西洋美術館

世界遺産推薦書類における国立西洋美術館の位置づけは「東京の国立西洋美術館は世界中どこへでも移植可能な無限成長美術館のプロトタイプの実現形であり、日本における〈ル・コルビュジエの建築作品〉の長い期間の受容、及び近代建築運動の国際化の過程を証言するものである。」である。

国立西洋美術館は、30年におよぶ探求による無限成長美術館のプロトタイプの実現形であるが、無限成長美術館のプロトタイプによる美術館は他にインドに二つ実現されたが、その保存状態の良さ、国レベルの文化財指定がされていることが考慮され、その代表例として世界遺産の構成資産のひとつとなっ

ている。ル・コルビュジエが構想した標準化された公共建築のプログラムとしてこの美術館は、個人と共同社会との均衡を図る都市的スケールの施設タイプであり、また、アテネ憲章に採用された原則において、〈輝く都市〉における住居棟の足もとに実現することを見込んだ施設の原型でもあることが評価された点である。

国立西洋美術館の設計のもとになったプロトタイプ「無限成長美術館」のアイディアを、ル・コルビュジエは1929年のムンダネウムの「世界美術館」プロジェクト時に得て、それを「近代美術館」（パリ、1931）プロジェクトの際に整理しなおした。建物の中心の吹抜の部屋に入り、スロープを昇って2階へと達する。そこから外側へ螺旋を描きながら延びる順路が設定され、収蔵すべき作品が増えると順路の延長線上に外部が増築され、展示スペースを広げることができる。この無限成長美術館について、ル・コルビュジエは当時、「有機的生活なら、そうするであろうことに従って自然に成長する法則にのったもの…釣合がとれながら追加拡大のできる要素、全体の構想が部分において先行した考え方」と述べ、時代ごとの要求性能に従って増築を続けながら変化し続ける建築の考えを提案する。しかし、国立西洋美術館においては要求性能の変化に伴い増大していったものの、ル・コルビュジエが無限成長美術館において構想した増築方法によっては、実際されなかったのである。

1959年の竣工以来、国立西洋美術館の社会におけるあり方は大きく変わってきた。西洋美術を対象とした美術館としての基本的機能は変わっていないが、国立西洋美術館への期待を背景に、美術品の収蔵点数、美術館への来館者数、美術館で働く職員数など、すべてが増加し続けた。竣工後の1964年には本館の西側に、当初のル・コルビュジエの図面に描かれていた講堂（現存せず）が完成し、北側には事務機能の補完のために事務棟（現存せず）が建設される。これらの増築工事は1959年時に達成できなかつた機能を補完するものと位置付けられる。

日本における西洋美術への関心は開館当初より高く、また、国立西洋美術館における様々な展覧会を通して、その関心は益々高まっていた。なかでも1964年に開催された展覧会「ミロのビーナス特別公開」は話題を呼び、38日間の会期中に83万人が来場した。入場のための行列は、上野公園内を縦断して西郷隆盛像の下の公園入口まで続いていた。

このような西洋美術に対する関心を背景に、国立西洋美術館に対する要求性能は、来館者の観点からも、収蔵品の点数の観点からも見直しが求められた。竣工後の1979年には前川國男の設計により本館の背後に地上2階、地下2階の新館が開館し、展示面積は2倍に増え、版画・素描専用の展示室も設置された。従来は特別展開催のたびに平常展示の松方コレクションを撤去していたが、展示面積の増大により、松方コレクションの常時陳列が可能となったのである。

美術館の将来構想への検討を目的として、1995年8月には「21世紀構想検討委員会」が設置され、1995年1月の阪神大震災後の対応も検討がなされた。1997年12月には企画展示館が竣工し、1998年3月には本館耐震改修（免震化など）の工事が終了し、現在の姿となっている。この耐震改修においては、歴史的・文化的価値への配慮として、ル・コルビュジエのオリジナルデザインを保存しながら耐震性を向上させるため、日本初の免震レトロフィット工法（既存の基礎部分に免震装置などを設け、建物のデザインや機能を損なわずに地震に対する安全性を確保する補強方法）を採用している。また、企画展示館の増築工事に関しては美術館機能を拡充し、かつ上野公園内の景観に配慮し前庭地下に増築している。文化財に指定される前に、このような決定を下したことは注目に値する点であると同時に、このことが今回の世界遺産の登録に非常に重要であった。

本館部分は、2007年12月に重要文化財に指定され、また、2009年7月に敷地が名勝地関係の登録記念物に登録された。このことにより、重要文化財としての適切な保存と管理を図りつつ、美術館としての機能を維持、向上できるように「保存活用計画」を国立西洋美術館は作成することとなった。この保存活用計画により、今後も予想される要求性能の変化に対し、国立西洋美術館は建物の機能維持や向上だけでなく、文化財としての価値に今まで以上に留意しながら応えてゆくことになるであろう。

3. おわりに

今回、東アジアではじめてモダン・ムーブメントの建築作品が世界遺産となった。国立西洋美術館の対面にある前川國男設計による東京文化会館（1961年）、プロトタイプ「無限成長美術館」の世界初の実現形とも言われる坂倉準三設計による旧・神奈川県立近代美術館（鎌倉館）（1951年）のほか、丹下健三設計による国立代々木競技場（1964年）など、未だ国の指定重要文化財にはなっていないが、日本には国立西洋美術館のほかに、多くの国際的にも注目をあつめるモダン・ムーブメント建築の傑作が多い。今においても多くの人々に親しまれ使われ続けられている建築作品の名品を、今後、単なる有用性のある建物としてだけでなく、我々の文化遺産のひとつとしての意識が、今回の世界遺産登録を機会に高まることを期待したい。

< 略歴 >

- 1990年 東京理科大学 工学部第一部建築学科 卒業
- 1990年 香山アトリエ・環境造形研究所（現・香山壽夫建築研究所）〔1994年まで〕
- 1995年 パリ・ベルヴィル建築大学 DPLG 課程(フランス政府給費留学生)〔2001年まで〕
- 1998年 アトリエ・アンリ・シリアニ（文化庁在外派遣芸術家研修員）〔2000年まで〕
- 1999年 ナント建築大学契約講師 M.C. 〔2001年まで〕
- 2002年 パリ大学 I パンテオン・ソルボンヌ校 博士課程修了
- 2002年 東京理科大学工学部 専任講師
- 2005年 東京理科大学工学部 助教授
- 2015年 東京理科大学理工学部 教授

= 現在 =

- 東京理科大学工学部 教授、博士（美術史学）
- Architecte DPLG (フランス政府公認建築家)
- Docomomo international ボードメンバー
- Docomomo Japan 副代表
- 日本イコモス理事
- 国立西洋美術館客員研究員 など